

研究課題	幸せな未来を主体的に切り拓く「学び手」の育成に向けた学校のシンカ
副題	「認知能力」と「非認知能力（12の力）」を一体的に育む、「誰一人取り残さない」カリキュラムの開発
キーワード	非認知能力/総合的な学習の時間/圧倒的当事者意識/カリキュラム開発/職員研修
学校/団体名	京都府舞鶴市立和田中学校
所在地	〒625-0085 京都府舞鶴市和田 640 番地 4
ホームページ	https://wada-maizuru.edumap.jp/

1. 研究の背景

本校は京都北部舞鶴市にあり、全校生徒 90 名の小規模校である。市内唯一の 1 小 1 中の学校であり、集団が幼少期からほぼ変わらないという特徴がある。近隣には保育所や幼稚園があり、校種を越えたつながりがとりやすい環境もある。小中が一貫して「学び手」を育てることを目標に掲げ、ここ数年は総合的な学習の時間を窓口に、各教科の授業内容と総合的な学習の時間とのつながりを意識できるようになってきた。

一方、地域の土着性が強く、幼少期から同じ人間関係の中で育つことで人間関係が固定化される面がある。さらに、家庭生活様式の変化、また、成長や発達にともなう人間関係の変化、実体験が不足していることやコミュニケーション能力の低さなどにより、自信の欠如、自己肯定感の低さを感じる生徒が年々増えている。加えて、心理的安全性が低い学級では、自分の殻を破ることができず、受け身になってしまう生徒も少なからずいる。

また、現代は VUCA (Volatility (変動)、Uncertainty (不確実)、Complexity (複雑)、Ambiguity (曖昧)) の時代であり、教育においては、予想外の変化に直面しても、自己判断・自己決定できる人材を育成することが求められている。このような状況において、知識を単純に暗記や一方向的な学びで得られる知識だけでは不十分であり、むしろ、問題解決能力や批判的思考、協働力を育む「探究的な学び」への変換が必要とされている。

そこで、これらのことを踏まえ、総合的な学習の時間をさらに充実させるとともに、認知能力と非認知能力を一体的に育むための学習カリキュラムを構築したいと考え、本研究に至った。本校区では幼児期の教育から、中学校教育までの学びを滑らかに繋げ、困難な状況におかれている児童生徒を含むすべての子どもたちに、未来の社会の創り手として必要な力を育むことを目指している。

2. 研究の目的

3 年前より、総合的な学習の時間（以下、和田クエスト）で「探究的な学び」を実施している。和田クエストでは、総時間数の 7 割を地域や社会の課題だけでなく、自分が不思議だと思ったことやもっと知りたいと思ったことを掘り下げる時間に充てるようにした。スタイルを変えた結果、探究の過程において、生徒たちが主体性を発揮し、意欲的に取り組む様子が見られ、学びを

「自分事」として捉えていることが分かった。このことから、「課題発見、データの収集、分析、発表」といった探究のプロセスを、総合的な学習の時間だけでなく教科の学習にも取り入れるカリキュラムの開発をすすめることが、生徒の非認知能力を高めることはもちろん、認知能力を高めることにもつながるのではないかと考えた。

この取り組みが、主体的で柔軟な思考を育む基盤となり、変動の激しい社会にも適応できる力を育成することで、よりよい社会と幸福な人生の創り手になるための一歩を踏み出すことができると仮説を立てている。



図1 各校種の付きたい力（非認知能力）

3. 研究の経過

児童生徒が主体的な学び手となるには、保育所・幼稚園から中学校までの切れ目のない滑らかな指導を構築し、子どもたちの知的好奇心を喚起し、基礎学力をつけることが重要である。そこで、各校（園所）の授業の進め方や、子どもたちへのアプローチの仕方、使用する教材や教具の工夫などをお互いに知る機会を設定し、子どもの発達を見取り、学習支援や情報交流へとつなげた。また、各種調査による学力分析、質問紙調査による教科への取り組み方、考え方などの実態分析を小中一貫して進めている。特に、それぞれの発達段階で付きたい力を明確にし、それらを見える化したことで、5歳児までに育ててほしい10の姿が、小学校・中学校で付きたい非認知能力とつながっていることを意識できるようになった。これにより、これまでの学びを活かした単元構想ができるようになったこと、学びに向かう児童生徒への声のかけ方が変わってきたことなど、教師の指導方法も変化してきたと実感している。

表1 研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4月	和田クエスト、異年齢集団学習スタート 生成AI活用研修会	
5月	京都府学力・学習状況調査実施 探究ラボ設置	生徒アンケート
6月	小中一貫教育第1回授業研究会 ギミックシート導入	教師アンケート アセス
7月	夢講演会・和田クエストワールドカフェ	
8月	保幼小中高連絡協議会研修会	研修会の振り返り

	保育園公開参観（小学校・中学校）	
9月	小中一貫教育第2回授業研究会 生徒を交えた授業研究会及び熟議① 他校（若浦中学校）との交流会	熟議の記録 参観者アンケート
10月	小学生・中学2年生・地域を交えた熟議 台湾の生徒とのオンライン交流会	熟議の記録 生徒の振り返り
11月	未来を拓く学校づくり推進事業研究発表会 兼 小中一貫教育第3回授業研究会 大学生との交流会（2年生）（オンライン・現地）	参観者アンケート 生徒の振り返り アセス
12月	スクールミーティング（教育委員・中学生・教員の熟議） 情報活用能力育成授業（生成AI）	生徒・保護者アンケート
2月	大学生との交流会（1年生）（現地） 授業参観ウィーク 生徒を交えた授業研究会及び熟議②	生徒アンケート（非認知・ 和田クエスト） アセス

4. 代表的な実践

(1) 「問い」から単元を構想する

ア 和田クエストの取組

本校では、経済産業省の『社会人基礎力』に基づく12の非認知能力を身につけた、社会に貢献できる生徒（持続的な社会の創り手）の育成を目指している。その中心となるのが「総合的な学習の時間（和田クエスト）」である。この時間では小学校の学びを「深化」させ、個人探究を中心に、子どもたちの「やりたい・なりたい」を見つける時間、没頭できる時間として、学校全体で取り組んでいる。

今年度は探究サイクルの最初の段階である課題設定において、「問いづくり」に特に力を入れて取り組みを進めてきた。探究内容においては、どのテーマでも、目的やゴールを明確化することを重視している。

さらに、問いを深める過程として、子ども同士や教員との「壁打ち」を取り入れている。「壁打ち」とは、自分のアイデアを他者に伝え、フィードバックをもらうことで、考えを深める手法である。問いづくりの段階で、このプロセスを繰り返すことにより、子どもたちの興味や関心の幅を広げ、より深い学びへとつなげることができると考えている。

個人や小グループでの探究になるため、単元計画は生徒の手によって作成される。そのため、3年間を見通したカリキュラムと、年間の計画（羅針盤）を示し、「学習の道しるべ」とした。

月	4月	5月	6月	7月(学講座)	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月(学講座)	3月
1年	●開いづくりHow to 「究極のカラー 」ジョハリの意	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●開いづくりHow to 「究極のカラー」 ジョハリの意	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求
2年	●開いづくりHow to 「究極のカラー」 ジョハリの意	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●開いづくりHow to 「究極のカラー」 ジョハリの意	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求
3年	●開いづくりHow to 「究極のカラー」 ジョハリの意	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●開いづくりHow to 「究極のカラー」 ジョハリの意	●自分探しの旅 「まきがいモデル」	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求	●二探求

図2 和田クエスト羅針盤

イ QFT (Question Formulation Technique) を活用した授業づくり

課題発見力を磨くために、国語科を中心として、質問を効果的に作成し、思考を深めるためのトレーニングを行っている。質問を自分で作り出し、それを改善させていくプロセスを通じて、学びや理解を促進することができている。さらに、「開かれた質問」を Yes, No で答えることが出来る「閉じた質問」に変える過程では、ある一定自分なりの答えを用意する必要があり、仮説構築の力も育ってきている。

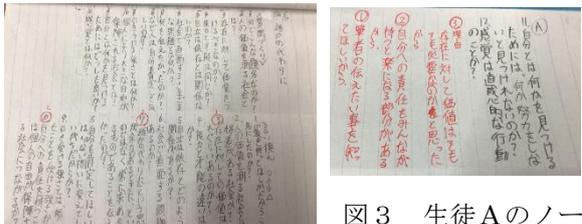


図3 生徒Aのノート

国語の問いを立て探究する活動を深めている。なぜかといと和田クエストでは色々な視点から物事を考えるから。

図4 生徒Bによる和田クエストと国語との関連

問2
「責任」について筆者はどのように考えているか説明せよ。

訴えや呼びかけに応じ合うという、協同の感覚であるはずのもので、最後まで独りで負わねばならないものではないし、何か失敗したときにばかり問われるものでもない

問2
「責任」について筆者はどのように考えているか説明せよ。

訴えや呼びかけに応じ合うという共同の感覚というもの。互いに問題を応じて助け合うこと

問4
筆者の言いたいことを自分の言葉で簡潔に説明せよ。

いつでも誰かの代わりにという思いをもち、人と支え合うことが大切

問4
筆者の言いたいことを自分の言葉で簡潔に説明せよ。

「自分とは何か」という問いは自分だけ見ているとは分からない。他の人たちと関わり合うことで見えてくる。だから人と関わり合うことが大切。

図5 loilonote による国語の小テスト

ウ ギミックシートの活用

授業を通じて子どもたちの非認知能力を引き出すためには、学習に主体的に取り組むためのきっかけづくりが重要である。特に、授業において圧倒的な当事者意識を持たせることが子どもたちの成長を促す大きな鍵となると考え、本年度から本校区では「ギミックシート」を活用し、授業計画を立てている。

このシートを使用することで、授業設計時に子どもたちがどのように学びに向かうのか意識しやすくなる。具体的には、各授業で引き出したい非認知能力を明確にし、それを促すための空間設計や教具、活動内容を考慮していく。単元を通して、このように工夫

授業者	教科	社会科
単元名 (活動名)	第3章「日本の地理」 7節北海道地方	
本時の内容	なぜ、美しい自然環境の中、日本の食料基地に選ばれたのか?	
本時のねらい	【付けたい】 主体性、実行力、情報力、発信力	
本時のギミックポイント	<ul style="list-style-type: none"> 【行動指針】 「北海道地方の美しい自然環境をどのように活用しているのか」を調べ、発表する。 学習活動 北海道 イメージ (絵やイラスト、グループワーク、発表など) 環境 ペア活動 教具 教科書 ギミック 調べた内容、資料集、地図、タブレット ギミックポイント 調べた内容、資料集、地図、タブレット 	
授業観察を通して気づいたことや振り返り	<p>授業者が育みたい非認知能力に関わって</p> <ul style="list-style-type: none"> ●どの非認知能力を ●どんな活動で ●ねらいとする姿を具体的に記述 	

図6 ギミックシート

することで、授業の目的が一層明確になり、それに基づいた教材や活動を準備することができるため、授業全体の質が向上するとともに、子どもたちの学びに対する意欲が高まっている。

(2) 生徒参画型職員研修 ～熟議を通して～

今年度は、「圧倒的当事者意識が持てる授業」をキーワードに、生徒参画型の職員研修を3回実施した。教職員とともに生徒が授業を観察し、その後、授業について教員と生徒が語り合う「熟議」を行った。授業観察では、教師がどのような工夫を用意して生徒を授業に引き込んでいるのか、また、生徒がそれをどのように捉えているのかを観察することができる。さらに、その後の熟議では、授業改善に向けた具体的な意見交換の場となる。生徒から出された様々な意見を通じて、授業改善に向けた具体的な方策を考えるきっかけにあるため、教師としての成長につながっている。



図7 熟議の記録

(3) 環境づくり

GIGA スクール構想により、一人1台端末環境は整備されているが、今年度4月の段階では教科指導における ICT 活用や情報教育、情報化の推進体制において十分な水準に達していなかった。具体的には、各教科等の学習で ICT を効果的活用するためのカリキュラム・マネジメントに課題があり、授業改善が進んでいなかったことが挙げられる (JAET 学校情報化認定による調査結果より)。そこで、生徒が気軽に ICT を活用できるよう、「探究ラボ」を設置した。

設置後は、生徒が主体的に学ぶ場になっており、年度末にとったアンケートでその効果が明らかになった。

●学習するときに、ICT 端末を使うことで、ほかの人と意見や考えを共有しやすい

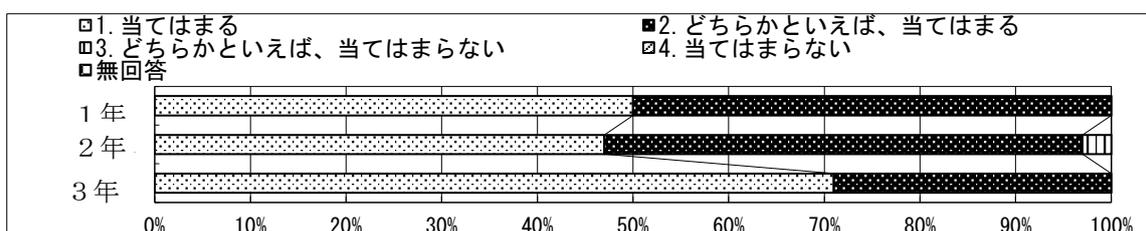


図8 ICT 端末の効果

今後は、協働的な学びを進めるため、探究ラボの整備を更に進め、ICT 教材の活用を一層充実させ、より効果的な学習支援体制を構築していく予定である。



図9 探究ラボ教室

5. 研究の成果

今年度は、生徒たちの「課題解決力」や「学びに対する積極性」を高めるため、教師、地域、生徒同士による「壁打ち（問い返し）」に時間をかけて取り組んだ。また、問いを深掘りするには「ファシリテート」の力が有効であると考えたことから、学校内にとどまらず、学校関係者を含む地域の方々、保護者、小学生、大学生などと議論を行う「熟議」を生徒主導で行った。

このことにより、少しずつではあるが、周りの意見を取り入れながら、よりよくありたいという思いが芽生え、和田中生が大事にしたい12の力（非認知能力）が高まってきている。

本校区で一貫して取り組んできた成果として、京都府学力学習状況調査のアンケート項目から、関連のある非認知能力を抽出して5月（before）と2月（after）に比較した結果（中学3年生）を以下に示す。

●学んだことをもっと理解するために参考書などをよく読む

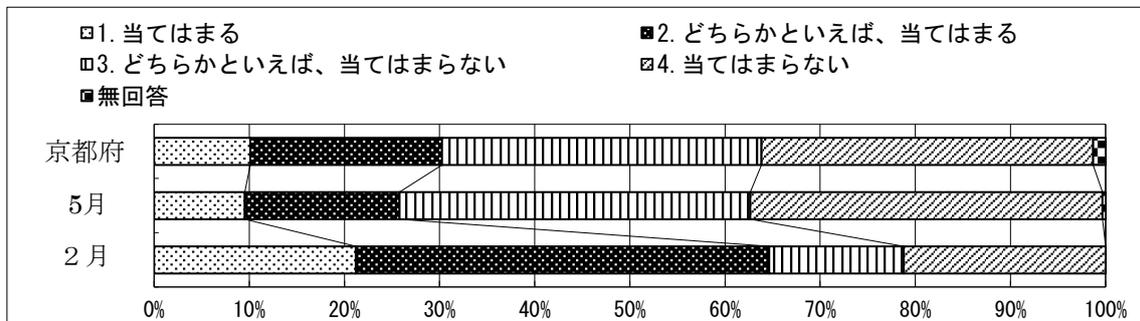


図10 「学びに対する積極性」を調査したアンケート

●学習するとき、自分で考えたことをあらためてまとめなおしたりする

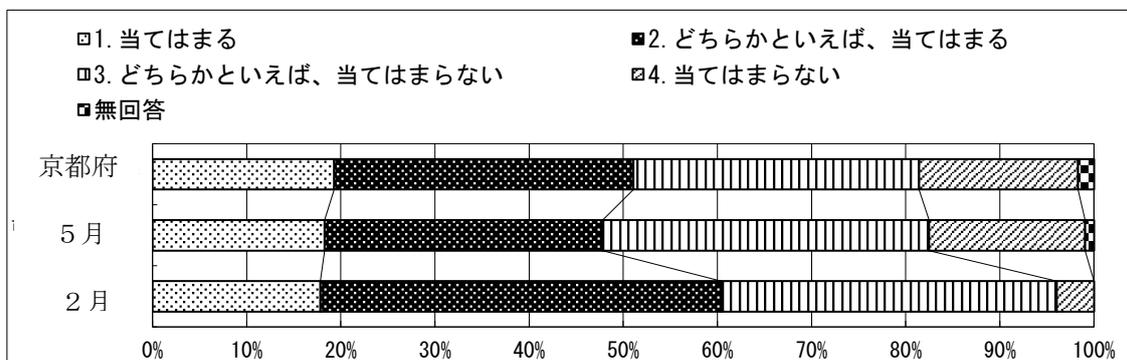


図11 「自己調整力」を調査したアンケート

● 普段の生活の中で、自分がみんなとちがう意見や本当の気持ちを言っても、だれからも責められたり傷つけられたりする心配はない

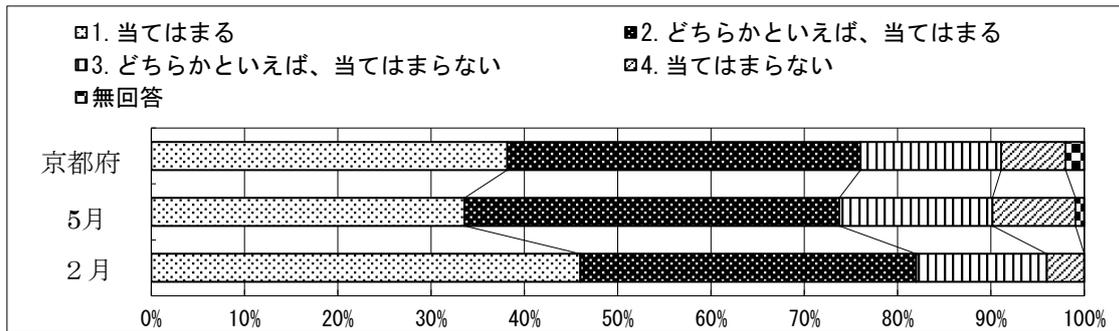


図 12 「心理的安全性」を調査したアンケート

また、子どもたちが変容することで、教員の見方・考え方が変化していったことが年度末アンケートからもわかる。

<p>総合的な学習の時間の指導を通じて、子どもの非認知の能力を高めるとは、人間力を培うものだと再認識しました。今年度は、子どもたちとたくさん話し合う機会を持ち、「間違いは、更新すればいい。正解は自分の中にある」と、語り続けています。子どもがどんどんアップデートし成長していることを、評価し、年度末のこの時期に褒めてやりたいと思います。</p>	<p>未来を切り開くって…大人になるまでだけでなく、生きている限りいる力ではないかと考えた。 生徒にとって総合学習の時間が大切な時間になるようにどんな声掛けや仕掛け、支援ができるかを改めて考え実行することが大事だと気がついた。また、さらに生徒たちにとっては大切な一年なので一年を大事に過ごさせたいと思った。</p>
<p>未来を切り拓く力を子供たちにつけていくためには、そもそもどんな人になりたいか、毎日をどういきたいか、そのためにどんな力をつければよいかを考えることが大切だと気付きました。子どもも大人も、日々、学び、自分をアップデートしていくことで、予測不可能な社会を生き抜くことができると思いました。</p>	

図 13 年度末教師アンケート（下線は筆者）

<p>和田クエストを通してより良い物を作ろうと思ったら、何回も試作をして改善点を見つけてそれを改善するしかないなと思いました。今回取り組んだパウンドケーキも、最初食べてみて抹茶の味が薄く、食べてもらう道具にも問題点があったので一発本番で作るよりは、何回も作って多くの人に食べてもらってたくさんアドバイスをもらうしか良くなる方法はなかったので、作った物の良くなかった所を言われるのを恐れずに聞きに行くことが大切だと学びました。</p> <p>また、この探究をしていなかったら日星高校の先生や生徒さん、参加して下さった人と関わる機会もなかったので人とながる良い機会になったと思います。パウンドケーキやカップケーキも食べてもらって美味しいと笑顔になってもらえたので、この探究をしてきて誰かのためになったんだなと思いました。</p> <p>これからも自分が疑問に思った事は自分が納得に思うまで調べて浮かんだ疑問が解決するように改善点を見つけながら取り組んでいきたいです。</p>	<p>この3年間グループで活動をしてきて、何かをグループでする時には、自分の得意な事を活かしてした方が力を発揮できて、効率が良いという事を学んだ。また、自分の意見も言いつつ、たとえ相手の意見が自分とは違う考えだったとしても相手の意見を最後まで聞き、尊重する事が大切だという事も学べた。</p>
<p>1年生の時から問い作りを始めて、最初は問いをなかなか立てられなかったけれど、先輩の活動を見ると、それぞれ全然違う内容を自分たちのしたいように活動していて、「何でも自分の気になることややりたいことに挑戦して良いんだ」と思った。最初は難しく考えてしまったけど、自分の身近なことから、疑問に思うことや興味のあることを探求していけばいいと分かった。自分たちの活動が誰かの役に立ったり、喜んでもらえたりすると、とてもやりがいを感じたので、高校で探求活動をする際も、誰かの役に立てるような活動をしていきたい。</p>	

図 14 年度末生徒アンケート（下線は筆者）

総合的な学習の時間を軸にしながら、子どもも大人も失敗を恐れず、自分の納得解を求めていく姿勢が育っていることがわかる。とはいえ、まだまだ自分に自信が持てない生徒、自己肯定感やコミュニケーション能力の低さも相まって、自分の殻が破れない生徒がいることも事実としてある。そこで来年度は、多様な価値観を受け止める柔軟性や能動的に話を聞く傾聴力を磨くこ

とに重点を置きながら、生徒の非認知能力を高めるとともに、かかわりの中でうまれる「対話的で深い学び」を通して「認知能力」の向上を目指す。

6. 今後の課題・展望

今年度取り組んできたことを更にシンカさせ、未来の社会の創り手として必要な力となる「認知能力」「非認知能力」を一体的に育む学校づくりを引き続き行う。そのために来年度は以下の2点を更に発展させる。

(1) 総合的な学習の時間と教科の学習とを関連付ける横断的な学びの実践（ICTを有効活用）

知識を得るだけの授業から、得た知識を実生活に結び付けて活用したくなる「生徒がワクワクする授業」へとアップデートさせる。具体的には、教員の相互授業評価による検証と、生徒を交えた校内研修会（熟議）での自己調整を行う。

(2) アプリや生成AIを活用した「個別最適な学び」の展開

児童生徒が大人になったとき、生成AIは更に発展していると予想される。そのため、生成AIを課題解決のパートナーとして活用することができるよう、教員も生徒もメディアリテラシーや情報活用能力を高めていく。

7. おわりに

和田中学校区は、中舞鶴地域に住むすべての子どもたちの幸せな未来を実現できるよう、校種間の滑らかな接続のもと、認知能力と非認知能力を一体的に育む教育を進めている。今後も、子どもたちの実態を教育活動に反映させ、学校をシンカさせるため、各種診断テストやアンケートの結果を丁寧に分析し、校種間で共有していく。また、子どもたちの「やってみたい」、「わくわくしたい」といった、学びへの欲求に向き合い、寄り添い、心を耕すための良き理解者・伴走者であり続ける。そして、多様な人とのつながりを大切にする児童生徒の育成に努めていきたい。

8. 参考文献

- ・文部科学省（令和4年3月）『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）』株式会社アイフィス
- ・文部科学省（令和5年3月）『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（高等学校編）』株式会社アイフィス
- ・ダン・ロススタイン、ルースサンタナ（2020年）『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』新評論
- ・中山 芳一(2020年)『家庭、学校、職場で活かせる！自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ』東京書籍
- ・中山 芳一、葉一他(2023年)『VIEW next ONLINE 先の見えない時代を生き抜く上で求められる、非認知能力の育成について考える』https://view-next.benesse.jp/view_media/web-all/REPORT.pdf